愛知県埋蔵文化財センター研究紀要
第23号
2022.5
63-84p

尾張国冨田荘絵図に描かれた建物と海

～中世冨田荘周辺の古地理と遺跡～

蔭山誠一・鬼頭　剛

神奈川県鎌倉市円覚寺所蔵『尾張国冨田荘絵図』に描かれている名古屋市中川区戸田地区における古地理の解析と遺跡の調査成果について検討した。その結果、絵図に描かれた河道の流れや道路・堤防の位置を想定し、建物や海岸が描かれた意図の一端を示すことができた。

1. はじめに

本稿は、神奈川県鎌倉市に所在する円覚寺所蔵の『尾張国冨田荘絵図』（以下『冨田荘絵図』と呼ぶ、図 1）に描かれた冨田荘について、絵図に描かれた現在の名古屋市中川区戸田地区周辺の江戸時代以前の河川の変遷を明らかにし、周辺で行われた発掘調査の成果について検討し、伊勢湾奥部に立地する遺跡と古地形との関係を解明しようとするものである。

中世における尾張国冨田荘の調査・研究は、『冨田荘絵図』や関係する文書が多数あることから、歴史学による多くの研究蓄積があり、上村喜久子（上村 1986、上村 1990 など）等による総括が行われている。1998 年に刊行された『新修名古屋市史第 2 巻』には、市域の歴史として冨田荘形成の経緯やその背景について（上村 1997）と『冨田荘絵図』の絵図表現や冨田荘と一柳御厨との境争論、絵図の主題と作成契機などについて (村岡 1998) まとめられている。その後『冨田荘絵図』の主題について円覚寺所蔵文書・文書目録の読解と絵図表現との整合関係から絵図の主題と作成契機について、荘園の支配領域図としての主題があり、作成契機を文和四年（1355）にみられる守護土岐氏勢力による押領に対応するものと先の村岡の理解を補強した（上村 2001）。これらの研究に伴い、『冨田荘絵図』に描かれた地名などについて現地比定が大凡なされており、絵図に描かれた内容には絵図を描いた円覚寺側の意図を汲んだ描き分けの存在が指摘されている。

その他には歴史地理学的研究として安田喜憲による旧河川の抽出と条里地割の形成に関して、当地の発掘調査や花粉分析なども併せた考察がある（安田 1970）。また金田章裕は中世以後の集村化現象について論述する際、明治時代の地籍図の宅地分布の集村化した状況と比較して、『冨田荘絵図』に描かれた家屋が「全体に散在しているように見えることから、疎塊村もしくは小村的状況を示している」ものと評価されている（金田 1985）。

考古学的研究としては、1980 年代の遺跡分布調査で中川区など名古屋市内の荘域内の遺跡がいくつか確認され（愛知県教育委員会 1986）、1990 年代末からは千音寺遺跡や戸田遺跡（当初は戸田 B 遺跡）の発掘調査が行われて、成果をまとめた報告書（名古屋市教育委員会・名古屋市上下水道局・名古屋市住宅都市局）が刊行されている。愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会においても、成願寺付近の歴史地理学的分析、現地踏査による遺物採集調査などの分析により古代以後の遺跡の存在が明らかにされ、『冨田荘絵図』の北側に描かれた流路や道、建物などの現地の比定と遺跡の分布との関係について検討した（愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会 2004）。また今回の分析には直接関係しないが、絵図の右上に描かれた萱津付近については、鬼頭・蔭山他により分析が行われている（蔭山・加藤・鬼頭・鈴木・松田 2007）。

本稿では、名古屋市中川区戸田地区を中心とした明治 17 年作成の地籍図に記された土地利用・地割から抽出した地形と現在の地形図を解析した表層地形が、尾張沖積平野のどの部分の地形を示すことができているのか、また表現できた地形と『冨田荘絵図』に描かれた情報との対応関係を述べることにより、『冨田荘絵図』

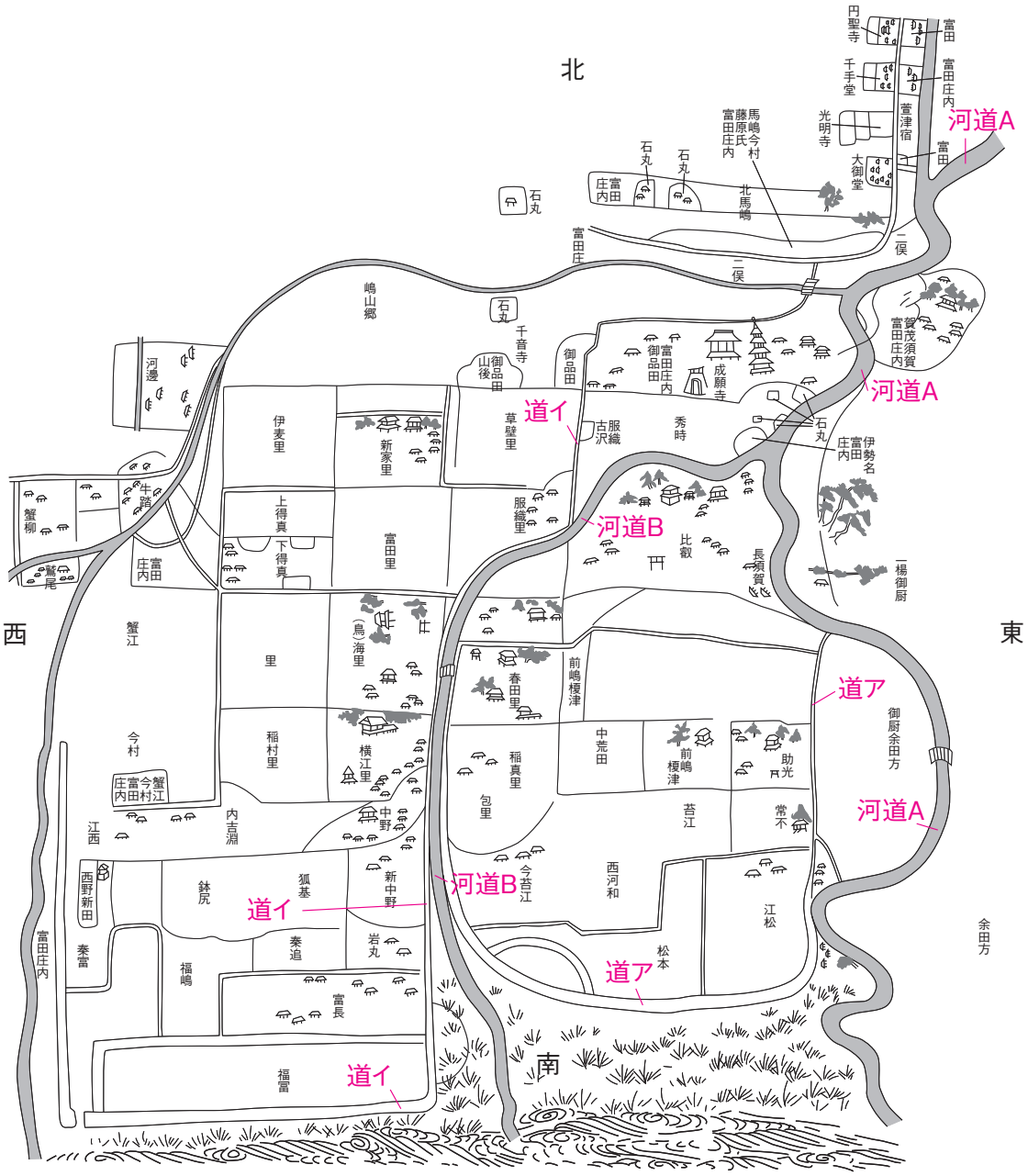


図１　尾張国冨田荘絵図のトレース図（赤字は本文記載の仮の名称）

の描かれた意図の一端を示すことが可能と思われる。

2. 地籍図からの解析

（1）地籍図の解析方法

名古屋市中川区戸田地区を中心とした南北約4.5km、東西約3.5km範囲について、愛知県公文書館所蔵の明治17年作成の地籍図を図化し、解析を行った。地籍図の図化にあたっては、愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会により図化された旧海東郡万場村・千音寺村・新家村の地籍図に、今回新たに旧海東郡の11ヶ村と旧愛知郡の3ヶ村の地籍図を追加した*（図2）。

地籍図の分析では、地籍図に記載された地割と地目に着目して、宅地・寺社・畑地・墓地・林・藪等の微高地群を18箇所（微高地群A～微高地群R）と微高地群に挟まれた水田と草生等の低地部14箇所（低地部A～低地部N）を抽出した。微高地群の抽出にあたっては、おおよそ自然河道などによる風成地形と思われる単

*図化した地籍図名　愛知郡:前田村、大蟷螂村、下之一色村、海東郡:万場村、千音寺村、新家村、伊麦村、長須賀村、正知村、伏屋村、春田村、戸田村、助光村、榎津村、供米田村、包里村、江松村

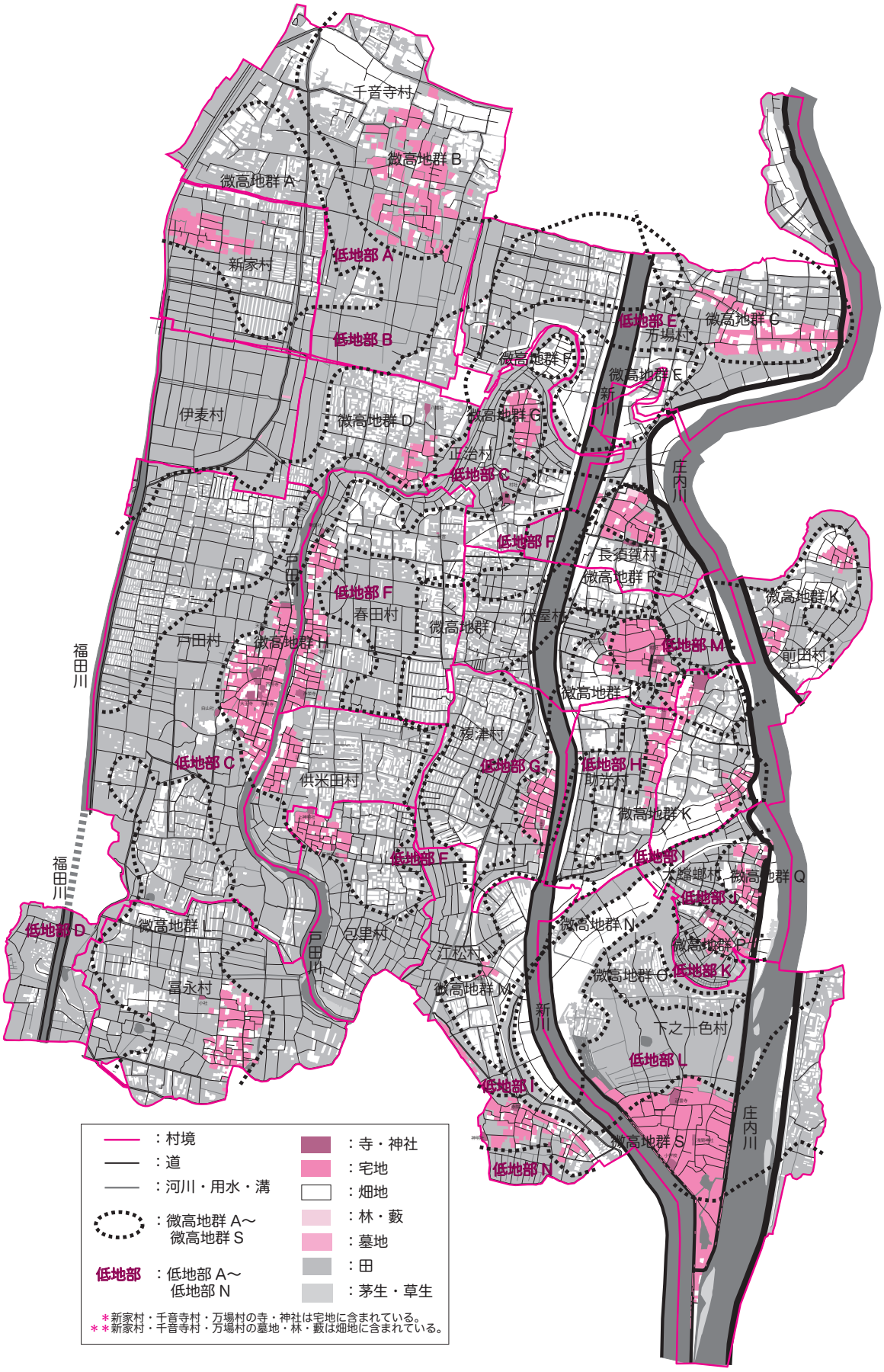


図２　名古屋市中川区戸田地区の地籍図（約 25,000 分の 1）

位の抽出に努め、江戸時代以後の堤や河川敷に所在する畑地などは周囲の土地利用の状況を考慮して抽出した。解析の結果を述べるにあたり、比較的大規模な河川は２つの並行する微高地群２箇所とその微高地群に挟まれた低地部１箇所をもって旧流路の痕跡としての地形が形成されたものと考え、地形１～地形 14 を分類した。また小規模な河川では、１箇所の微高地群の中に旧流路の痕跡と思われる比較的小規模で帯状の水田域など（低地部）を確認できる場合が認められる。

（２）地籍図解析により分類した地形

今回の分析範囲では、主に江戸時代以前に流れていた庄内川とその支流により形成された地形 14 箇所を分類した（図２・表 1)。地籍図にある地形の記述では、地籍図の単位である旧郡・村名によりその範囲を述べるが、旧郡名を省略し、村名のみで表記する。

地形１：微高地群 A（千音寺村南西部から新家村北東部）と微高地群 B（千音寺村北東部）に挟まれた低地部 A（千音寺村中央部）で、低地部 A は千音寺村南東部で低地部 B と合流し、微高地群 D で止まる。

地形２：低地部 A があるために連続していないが、北東側の微高地群 B（千音寺村北東部）から南西側の微高地群 A（新家村南東部）の南東側で、微高地群 D（万場村中央部から西部、正治村西部を経て戸田村北西部に至る）に挟まれた低地部 B(千音寺村南西部から伊麦村南東部、新家村南西部に続く）で、低地部 B は低地部 A とつながる。

地形３：庄内川に面する微高地群 C（万場村東部から万場村北側中央部）と微高地群 D（万場村北西部から千音寺村南東端部と正治村西部を経て戸田村北西部に至る）と微高地群 E（万場村南部から長須賀村北部）・微高地群 F（正治村北端部）・微高地群 G（正治村北東部）に挟まれた低地部 E(万場村中央部から南西部) で、低地部 E は万場村南東端部にて庄内川に接する。低地部 E は低地部 C と接続していた可能性もあるが、微高地群 D により南が止まる。

地形４：微高地群 D（万場村西端部から千音寺村南東端部と正治村西部を経て戸田村北西部に至る）・微高地群 E（万場村南部から長須賀村北部）・微高地群 F（正治村北端部）・微高地群 G（正治村北東部）・微高地群 L（戸田村南部から冨永村中央部）と微高地群 H（長須賀村中央部・小千村南端部、春日村北部から西部を経て戸田村東部・供米田村・包里村北部に至る）に挟まれた低地部 C（長須賀村北部から正治村中央部と戸田村中央部を経て供米田村南西端部・冨永村東部・包里村南部に至る）で、低地部 C は西の低地部 D とつながり、長須賀村北部で庄内川に接する。微高地群 E ～微高地群 G の間には低地部 C とつながる低地部が見られ、微高地群 G の周囲をめぐる蛇行流路の痕跡を残す。

地形５：東側の微高地群 L（戸田村南部から冨永村中央部）とその西にある低地部 D（戸田村南西部）で、微高地群 L は微高地群 D とつながっていた可能性がある。

地形６：微高地群 H（長須賀村中央部・小千村南端部、春日村北部から西部を経て戸田村東部・供米田村・包里村北部に至る）と微高地群 I（長須賀村中央部から伏屋村南西部・春田村南東部を経て榎津村西部に至る）に挟まれた低地部 F で、低地部 F は長須賀村中央部と春田

表１　地籍図からみた地形分類

地形分類	西側・北側微高地群	低地部	東側・南側微高地群	備考
地形1	微高地群 A	低地部A	微高地群 B	
地形2	微高地群 A・微高地群 B	低地部B	微高地群 D	
地形3	微高地群 C・微高地群 D	低地部E	微高地群 E・微高地群 F・微高地群 G	
地形4	微高地群 C・微高地群 D・微高地群 F・微高地群 G・微高地群 L	低地部C	微高地群 H	一部が冨田荘絵図の旧戸田川、戸田遺跡確認自然河道跡
地形5	-	低地部D	微高地群 L	
地形6	微高地群 H	低地部F	微高地群 I	一部が正保国絵図の旧五条川
地形7	微高地群 I	低地部G	微高地群 J	
地形8	微高地群 J	低地部H	微高地群 K の南西側	
地形9	微高地群 K の南西側・微高地群 M	低地部I	微高地群 N・微高地群 Q	18 世紀後半以前の瀬替え前の旧庄内川
地形10	微高地群 Q	低地部J	微高地群 P	冨田絵図の庄内川
地形11	微高地群 P	低地部K	微高地群 O	
地形12	微高地群 O	低地部L	微高地群 S の東側	
地形13	微高地群 R	低地部M	微高地群 K の北東側	冨田荘絵図の庄内川の可能性
地形14	微高地群 S	低地部N	-	江戸時代の干拓地に接する

村東部の２ヶ所において微高地群Ｈと微高地群Ｉに閉ざされる。
地形７：微高地群Ｉ（長須賀村中央部から伏屋村南西部・春田村南東部を経て榎津村西部に至る）と微高地群Ｊ（伏屋村中央部から助光村北西部を経て榎津村東部に至る）に挟まれた低地部Ｇ（伏屋村中央部から榎津村中央部）で、低地部Ｇの南側は低地部Ｈとつながる。低地部Ｇの伏屋村中央部北側では微高地群Ｒが巡っている。
地形８：微高地群Ｊ（伏屋村中央部から助光村北西部を経て榎津村東部に至る）と微高地群Ｋ（前田村から助光村南部に至る）に挟まれた低地部Ｈ（伏屋村中央部の南側から助光村中央部を経て同村南西端部に至る）で、低地部Ｈは榎津村南東端部で低地部Ｇにつながる。低地部Ｈの伏屋村中央部南側で微高地群Ｒが巡っている。
地形９：微高地群Ｋの南西側（前田村南西部から助光村南部に至る）・微高地群Ｍ（助光村南西端部から江松村中央部に至る）と微高地群Ｎ（下之一色村北端部から江松村中央部に至る）・微高地群Ｑ（大蟷螂村北東部）に挟まれた低地部Ｉで、微高地群Ｋと微高地群Ｍは分けているが、助光村南端部にて堤状畑地でつながる。また微高地群Ｎと微高地群Ｑも分けているが、大蟷螂村北西部にて堤状畑地でつながる。低地部Ｉは大蟷螂村北東端部で庄内川と接する。
地形10：微高地群Ｑ（大蟷螂村北東部）と微高地群Ｋの一部（前田村南部）･微高地群Ｐ（大蟷螂村中央部南側）に挟まれた低地部Ｊ（大蟷螂村中央部北側）で、低地部Ｊの東側で庄内川に接する。低地部Ｊは微高地群Ｎから北東にのびる堤状畑地により閉じられており、微高地群Ｐの北西部で低地部Ｋと低地部Ｊはつながる。
地形11：微高地群Ｐ（大蟷螂村中央部南側）と微高地群Ｏ（下之一色村北部）に挟まれた低地部Ｋ（大蟷螂村南端部･下之一色村北東端部）で、低地部Ｋの東側で庄内川に接する。低地部Ｋは微高地群Ｎによりその北西部を閉じられており、微高地群Ｏの北西部で低地部Ｌと低地部Ｋはつながっている。
地形12：微高地群Ｏ（下之一色村北部）と微高地群Ｓの東側（下之一色村南部）に挟まれた低地部Ｌ（下之一色村中央部）で、低地部Ｌの東側で庄内川に接する。低地部Ｌは微高地郡Ｎにより西側を閉じられており、微高地群Ｏの西側で新川や低地部Ｉと接する。
地形13：微高地群Ｒ（長須賀村中央部から伏屋村東部を経て前田村南西部に至る）と微高地群Ｋの北東側（前田村北東部）に挟まれた低地部Ｍ（長須賀村南東部から伏屋村東部）で、低地部Ｍは長須賀村南東部から伏屋村東部で庄内川に接する。低地部Ｍは伏屋村南東端部でも庄内川に接するが、前田村北東部から続く微高地群Ｋにより閉じられているようにもみえる。
地形14：微高地群Ｓ（下之一色村東部から同村南部を経て江松村南部に至る）と微高地群Ｓの南にある低地部Ｎ（江松村南端部）で、微高地群Ｓは庄内川と新川に切られる。

（３）地形の変遷

次に14地形に分類した地形の変遷について検討する。各地形を構成する微高地群と低地部の重複関係と接合関係で、地形の大凡の変遷を検討する。また先の分析により地籍図から抽出した地形１～地形14は江戸時代後期以後の状況を反映する地籍図にみられる庄内川と新川より古い地形である。

地形１と地形２は、低地部Ａが千音寺村南東部で低地部Ｂと合流し、微高地群Ｄで止まることから、地形４に先行する地形である。また低地部Ａは低地部Ｂとつながることから、低地部Ｂの形成は地形１の微高地群Ａ・微高地群Ｂと同時期かより古い可能性が高い。

地形３の低地部Ｅが万場村南東端部で、地形４の低地部Ｃが長須賀村北部で庄内川に接する。また低地部Ｃは地形５の低地部Ｄとつながる。地形４の微高地群Ｅ～微高地群Ｇの間には低地部Ｃとつながる低地部が見られ、蛇行流路の痕跡と考えられる。また低地部Ｅは低地部Ｃと接続していた可能性もあるが、低地部Ｅは微高地群Ｄにより南が止まることから、地形３は地形４より古い地形と考えられ、地形５は地形４と同時期の地形になる可能性がある。

地形６は、低地部Ｆが長須賀村中央部と春田村東部の２ヶ所において地形４にも関わる

微高地群Ｈと地形７の微高地群Ｉに閉ざされており、地形６は地形４と地形７より古い地形と考えられる。

地形７の低地部Ｇと地形８の低地部Ｈが榎津村南端部においてつながり、低地部Ｇの伏屋村中央部北側において、低地部Ｈの伏屋村中央部南側で地形13の微高地群Ｒが巡っている。よって地形７と地形８は同時期の可能性があり、地形13より古い地形と思われる。

地形９は低地部Ｉが大蟷螂村北東端部で庄内川と接しており、微高地群Ｍと微高地群Ｎは新川により切られており、地形９は新川掘削以前の地形である。

地形10の低地部Ｊは大蟷螂村中央部で、地形11の低地部Ｋは下之一色村の北端部にて、地形12の低地部Ｌは下之一色村中央部東側で庄内川に接する。地形10の低地部Ｊは地形９の微高地群Ｎから北東にのびる堤状畑地により閉じられており、微高地群Ｐの北西部で低地部Ｋと低地部Ｊはつながっていることから、地形10は地形９と地形11より先行する地形と思われる。同様に低地部Ｋは微高地群Ｎによりその北西部を閉じられており、微高地群Ｏの北西部で低地部Ｌと低地部Ｋはつながっていることから、地形11は地形９と地形12より先行する地形と思われる。同様に低地部Ｌは微高地郡Ｎにより西側を閉じられており、微高地群Ｏの西側で新川や低地部Ｉと接することから、地形12は地形９と新川より先行する地形である。

地形13の低地部Ｍは長須賀村南東部から伏屋村東部で庄内川に接する。低地部Ｍは伏屋村南東端部で庄内川に接するが、前田村北東部から続く地形９の微高地群Ｋにより閉じられているようにもみえ、地形13は地形９より古い地形である可能性がある。

地形14の微高地群Ｓは庄内川と新川に切られる。

以上をまとめると、地形１～地形３・地形６は地形４に先行する地形で、地形６は地形７より古い地形と考えられる。地形４と地形５、地形７と地形８はそれぞれ同時期の地形になる可能性があり、地形７と地形８は地形13より古い地形と考えられる。地形９～地形12は、地形10より地形11、地形12、地形９、新川の順に変遷し、地形13は地形９より古い地形である可能性がある。

（４）地形の形成時期

以上の地形の変遷について大凡の時期を検討する。

まず、円覚寺所蔵『尾張国冨田荘絵図』に描かれた旧庄内川（以下河道Ａ）とその支流（河道Ｂ）の位置との対応関係を述べる。

今回地籍図において解析した範囲では、河道Ａは「賀茂須賀冨田庄内」の地点でやや東に振り、その南で大きく西に折れて支流である河道Ｂが「伊勢名冨田庄内」の南東にて南西に分かれる。河道Ａは河道Ｂと分かれた後、南下してやや東に振って３本の樹木絵の西で西へ少し曲がり、「長須賀」の辺りでふくらんで、東に大きく流れを振る。そして「御厨余田方」を大きく囲んで再び西に流れを変えて「江松」の東にある堤状道に当たり、南東に大きく折れて余田方に流れ、樹木の絵の南東でさらに西へ折れて、もう一度草生の北東端部で南に大きく折れて東に流れを変えて、草生の南東端部で南に折れて南南東に流下して海へと至る。地籍図との対応関係では万場村南東端部で微高地群Ｃの南で微高地群Ｅの東になる低地部Ｃにやや河道Ａが西に振って河道Ｂが分かれて低地部Ｅを流れる可能性もあるが、絵図の「長須賀」の東で西に流れがふくらむところを低地部Ｍに当てると河道Ｂは長須賀村北部にて河道Ａより分かれて低地部Ｃを流れる。河道Ａの南側では、絵図の「助光」と「江松」の位置が地籍図の助光村と江松村の位置で変わらず、また助光村の東側村境が絵図の「助光」と「江松」の東を区切る道アとおおよそ同じ地点を通ると考えると、「江松」の東にある堤状道に河道Ａの流れが当たるのは地籍図低地部Ｊの部分となる。

続いて河道Ｂは、河道Ａより絵図の「伊勢名冨田庄内」の南東にて南西に分かれ、一度少し南下して寄棟風建物の絵の北で西北西に流れを変えて北にふくらみ、「服織古沢」の南東にて南西に曲がって、「服織里」の東で条里状に北から南下する道イに当たり、「服織里」の南を道イに沿って南西に流れる。そして「（鳥）

時代	鎌倉時代以前で時期不明		富田荘絵図（室町時代）	～江戸時代中期	江戸時代後期以後
地形				地籍図の福田川	→地籍図の福田川
	地形1～地形3	→ 地形４・地形5	→富田荘絵図の戸田川、河道B（地形4の部分を含む）	→湿地化→尾張国元禄国絵図の戸田川	→地籍図の戸田川
		地形13	→地形13（富田荘絵図の庄内川、河道A）	→正保尾張国図・正保尾張国図・図の萱津川・地形６の一部	→尾張絵図・尾張国明細図の萱津川・新川（地籍図の新川）
	地形６	→ 地形7・地形8	→地形10（富田荘絵図の庄内川） 地形14	→地形11→地形12→地形９	→地籍図の庄内川

図３　地籍図からみた地籍の変遷

海里」と「春田里」の間、「横江里」と「稲真里」の間、「中野」と「包里」の間、「新中野」と「今苔江」の間を堤状道に挟まれる中を流れて、「岩丸」・「富長」の東にある草生の中を南南東に流れて海に至る。地籍図との対応関係では、河道Ｂは長須賀村北部にて河道Ａより分かれて低地部Ｃを流れる。そして水田域のつながりを重視すると、正治村と万場村の村境に沿って北上して、微高地群Ｇの北を西にすすんで、正治村中央部の微高地群Ｄの南東側に沿って南西に流れて春田村北西端部にて南に折れて南に流れる。この河道Ｂの屈曲部は、絵図の「富田里」が地籍図の伊麦村南東部にあたるものと想定されているので、絵図の「服織里」の南西部にあたる。河道Ｂがほぼ真っ直ぐに南に流下する部分は、低地部Ｃの春田村と戸田村の村境付近を流れる戸田川の位置とおおよそ対応するものと思われ、地籍図の戸田村と供米田村・包里村の村境に沿って戸田川が東に曲がって蛇行する流れとも大凡合うように思われる。地籍図にある新川と福田川は絵図には描かれていない。

次に、江戸時代の絵図との対応関係から、地形の形成時期を検討する。江戸時代の絵図には、江戸時代正保期の絵図とされる愛知県図書館所蔵『尾張国図　西』と江戸時代元禄期の尾張国絵図の控えとされる愛知県図書館所蔵『尾張国元禄国絵図』、江戸後期の愛知県図書館所蔵『尾張絵図』と同所蔵『尾張国明細図』、江戸時代後期の寛政頃に作成された愛知県図書館所蔵『海東郡村邑全図』がある。これらの絵図に描かれた庄内川・五条川・萱津川・新川・戸田川・福田川と海岸側の干拓地堤防と村の位置、などにより大凡の地形の変遷を考えたい。

先ず庄内川は江戸時代正保期の『尾張国図西』と江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』では、地籍図の上流側ではほぼ同じ位置を流れるが、下流側では低地部Ｉの位置を流れており、江戸時代後期の寛政頃に作成された愛知県図書館所蔵『海東郡村邑全図』の『下之一色村』と『中須村』には「古川」として河道跡が描かれている。18 世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置でほぼ描かれている。

新川は 18 世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置でほぼ描かれている。

戸田川は江戸時代正保期の『尾張国図　西』には描かれていないが、江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』、18 世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置でほぼ描かれている。

福田川は江戸時代正保期の『尾張国図　西』、江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』、18 世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』、『海東郡村邑全図』の各村絵図に、地籍図の位置でほぼ描かれている。

萱津川（萱津井・五条川筋）は新川掘削以前に存在した河道で、地籍図の範囲ではほぼ同じ位置を流れると考えられるが、萱津川は江戸時代正保期の『尾張国図　西』に描かれ、上流で上萱津村と中萱津村の間から五条川から分流する河道で、江戸時代元禄期の『尾張国元禄国絵図』と 18 世紀末以後の『尾張絵図』と『尾張国明細図』では、上流で上萱津村の北側で法界門橋の南から清須川（幼川・五条川）から分流する河道である。この河道は、『尾張国冨田荘絵図』には描かれておらず、地籍図にも自然河

道としては辿れない。萱津川を江戸時代の絵図に描かれた村の位置をもとに辿ると、上流はおおよそ新川の位置を南下して流れ、長須賀村の北側で庄内川に最も接近し、長須賀村の東側で庄内川の西を南に流れ、長須賀村の南東で西に折れて長須賀村と伏屋村の間を流れ、伏屋村の西端部で南に折れて春田村と伏屋村の村境付近と供米田村と榎津村の村境付近を経て、包里村と江松村の村境付近の低地部Fを流れるものと思われる。低地部Fの南端である江松村から包里村を経て冨永村に至る村境は、江戸時代正保期の『尾張国図　西』で、五条川筋が「福田新田」と記された干拓堤防の内側に流下する北側干拓地境の形状と似る。

以上の地籍図から分類した地形の変遷と地形形成の時期分析の結果をまとめたものが図3である。(蔭山)

3. 等高線図による解析

(1) 分析方法

調査地点を含めた周辺地形を解析するため、1/2500スケールで等高線図を作成した。等高線図の作成にあたり愛知県名古屋市発行の「名古屋市都市計画基本図(1/2500)」にプロットされた標高値を基にした。2010(平成22)年に測量されたものを用いた。なお、現在の河川堤防や高速道路、工場や学校といった人工的に建設されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。

(2) 分析結果

(2)-1　遺跡周辺の等高線図

東西約5.85km、南北約5.88kmの範囲全体では標高-1.8mから標高1.0mまでの等高線が描かれる(図4)。解析範囲全体では図の北と北東方向で相対的に高く、解析範囲の北東、名古屋市中川区烏森町に標高1.0mを超える場所や、名古屋市中川区の万場に標高1.0mを超える場所がみられるものの、解析範囲の南と西は標高0mよりも低い場所となっている。およそ標高-1.4mを境にして等高線間隔が狭くて地形勾配が比較的急なところと、等高線間隔が広くて地形勾配が緩やかなところとに大きく2分される。解析範囲の南約3kmには伊勢湾がひろがる。河川はすべて北から南へ流下しており、西から福田川、福田川から東へ約880mで戸田川、戸田川から東へ約620mで新川、新川から東へ約200mで庄内川、庄内川から東へ約1.3kmで荒子川の5河川が流れる。解析範囲の北には北東-南西方向に名古屋市中川区八田から蟹江町にかけてJR関西本線が通る。また、近畿日本鉄道(略称近鉄)は八田から名古屋市中村区横井山緑地の南側まではJR関西本線と並行して通るが、横井山緑地の南側から線路は分岐し、さらに南西方向の近鉄蟹江駅へ向かう。図の中央部分には19号線が東西方向に、さらに南には国道1号、さらに南には70号線が通る。解析範囲のでは国道302号線が通る。図の北には名古屋高速5号万場線が通る。

等高線間隔には疎密差がみられ、疎密差の空間的な配置状況から低平な場所の起伏が読み取れる。解析範囲では、閉曲線の等高線からなる島状に高いところと、それらの間には谷地形が判別できる。先の河川沿いごとに標高の高いところから北、南へ順に述べる。

1. 西の福田川沿いには、解析範囲の北西側に伊福に標高-1.4m～-0.2mで解析範囲にかかっているところだけで東西約620m、南北約630mの標高の高い地形がみられる。また、その南の下ノ森付近にも標高-1.4m～-0.2mで解析範囲にかかっているところだけで東西約420m、南北約440mの標高の高い地形がみられる。福田川の東には千音寺に標高0m～0.6mで、解析範囲にかかっているところだけで東西約500m、南北約290mの標高の高い地形がみられる。さらにその南の服部にも標高-0.6m～0.2mの閉曲線で囲まれる東西約410m、南北約250mの島状に標高の高い地形がみられる。

2. 戸田川沿いには北からJR関西本線の春田駅の西側に、春田から供米田にかけて標高-1.4m～0.2mの閉曲線で囲まれた東西約630m、南北約1.2kmの島状に標高の高い地形がみられる。供米田の戸田川左岸には標高-1.4m～-0.8mの閉曲線で囲まれた東西約150m、南北約180mの島状に標高の高い地形がみられる。供米田からさらに南の「かの里」では、戸田川の左岸に標高-1.4m～-0.4mの閉曲線で囲

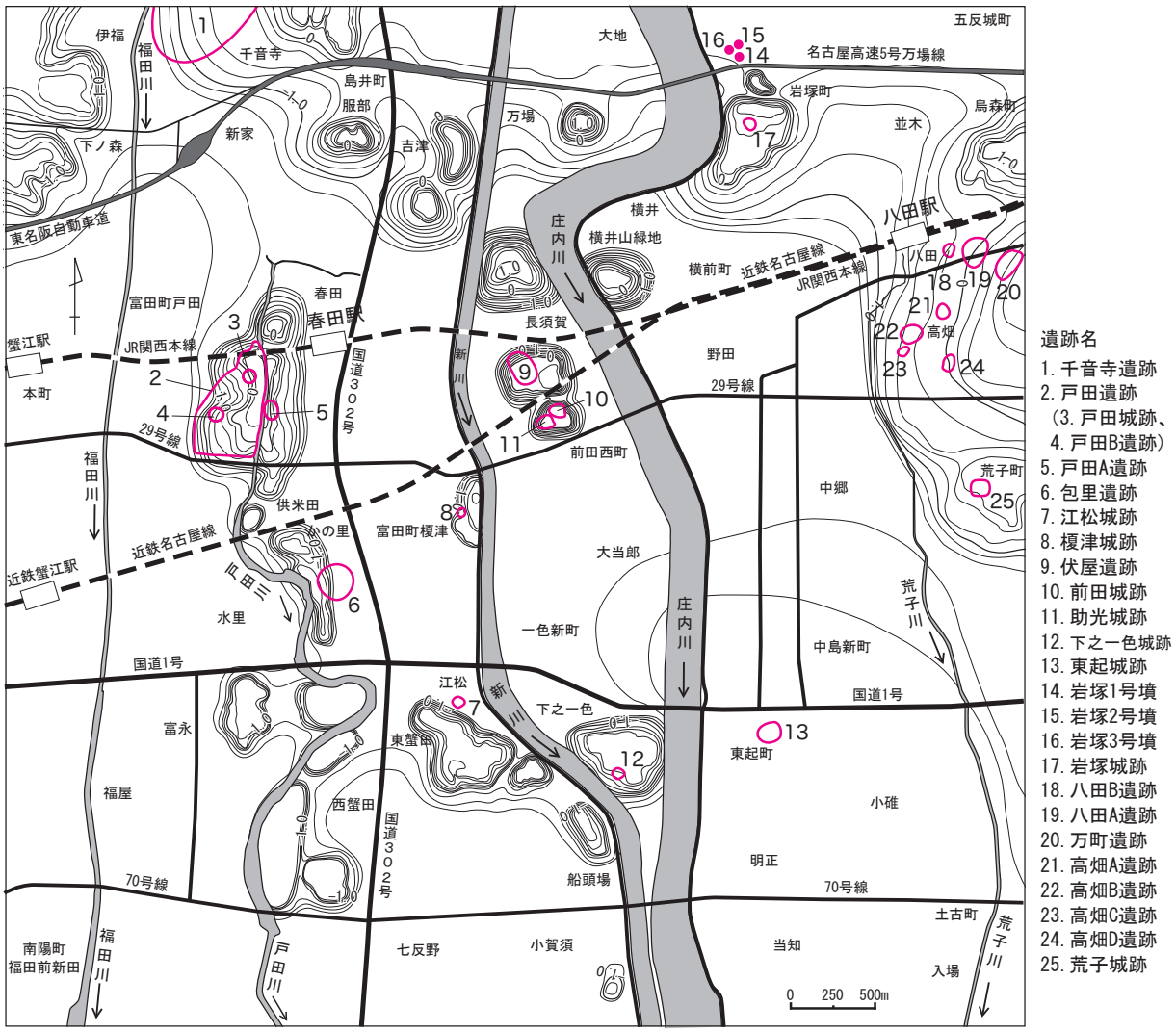


図４　名古屋市中川区および周辺の等高線図

まれた東西約 240m、南北約 650m の島状に標高の高い地形がみられる。かの里のさらに南の富永付近には戸田川の右岸に標高 -1.4m ～ -0.6m の閉曲線で囲まれた東西約 410m、南北約 250m の島状に標高の高い地形がみられる。また、そのさらに西にも標高の高いところが認められ、標高 -1.8m ～ -0.8m で東西約 290m、南北約 510m の島状に標高の高い地形がみられる。戸田川の左岸の西蟹田でも標高の高い 3 地域が認められ、北から標高 -1.6m ～ -0.8m の閉曲線で囲まれた北東 - 南西に約 350m、北西 - 南東に約 220m の島状に標高の高いところがみられる。上で述べた地形の南には戸田川の左岸に標高 -1.6m ～ -1.2m で東西約 260m、南北約 630m で島状に標高の高いところがみられる。さらにその東には標高 -1.8m ～ -1.2m で東西約 350m、南北約 410m の島状に標高の高いところがみられる。

3. 新川沿いには北から、新川の右岸である吉津において 2 つの標高の高いところが認められ、北には標高 -0.6m ～ -0.4m で東西約 230m、南北約 400m の島状に高いところ、その南には標高 -1.4m ～ 0.4m で東西約 410m、南北約 400m で南側に凸の舌状地形がみられる。富田町榎津の新川右岸には標高 -1.4m ～ 0.4m の閉曲線で囲まれた東西約 190m、南北約 420m の島状に標高の高い地形がみられる。富田町榎津のさらに南の江松、そしてさらに南の船頭場にかけての新川右岸には北西から南東方向へ 3 つの島状地形がみられる。北から標高 -1.4m ～ -0.2m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 620m、北東 - 南西方向の幅約 440m の島状に標高の高い地形がみられる。その南東には標高 -1.4m ～ -0.4m の閉曲線で囲まれた東西約 240m、南北約 180m の島状に標高の高いところがみられる。3 つ目の船頭場付近には標高

-1.4m ～ -0.6m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 350m、北東 - 南西の幅約 200m の島状に標高の高いところが認められる。さらに南の小賀須には新川右岸に標高 -1.2m ～ -0.8m の閉曲線で囲まれた東西約 110m、南北約 200m の島状に標高の高いところが認められる。

4. 庄内川沿いには北から万場付近の庄内川右岸において標高 -0.8m ～ 1.0m で東西約 260m、南北約 250m の南側への凸地形をもつ舌状地形がみられる。万場において庄内川を挟んで対岸の庄内川左岸には、岩塚町に南北方向に２つの島状地形が認められる。北のものは標高 0m ～ 0.6m の閉曲線で囲まれた東西約 160m、南北約 140m の島状に標高の高いところ、さらにその南には標高 0m ～ 0.8m の閉曲線で囲まれた北東 - 南西に約 530m、北西 - 南東の幅約 410m の南側へ凸の舌状地形がみられる。庄内川右岸のさらに南の長須賀では標高 -1.4m ～ 1.0m までの閉曲線で囲まれた東西約 360m、南北の幅約 490m の島状に標高の高いところがみられる。長須賀の庄内川を挟んだ対岸、庄内川左岸の横井山緑地には標高 -1.4m ～ 0.6m の島状に標高の高いところ、さらに南の前田西町には標高 -1.4m ～ 0.2m の閉曲線で囲まれた小さな島状地形が南北方向に２つ連なった形でみられる。北側のものは標高 -1.4m ～ 0.2m で東西約 440m、南北約 320m の島状地形と、標高 -1.4m ～ 0m で東西約 320m、南北約 240m の島状地形が認められる。さらに南の下之一色には庄内川の右岸と新川の左岸との間に標高 -1.4m ～ -0.2m の閉曲線で囲まれた東西約 560m、南北約 530m の島状に標高の高いところがみられる。

5. 荒子川の周辺には北から南へ中郷、中島新町、小碓、土古町、入場にかけて周りよりも標高の高いところはみられない。いっぽう、荒子川の北東にある烏森町には JR 関西本線の八田駅の北東に、確認されるだけで標高 0m ～ 1.0m で東西約 600m、南北約 350m で西方に張り出した舌状地形が認められる。その南の荒子町にも標高 -1.4m ～ 0.4m で、確認できるだけで東西約 620m、南北約 630m の南に張り出した舌状地形がみられる。

いっぽうで、谷地形もみられる。北西から南東へ順に列記する。

1. 図の北西、下ノ森に北と南に並ぶ標高 -1.0m の等高線がつくる東に張り出した舌状地形との間に、北から西へ約 80 度傾いた谷の長軸方向をもつ標高 -1.4m ～ -1.0m で長軸方向の長さ約 440m。長軸に直交する最大幅約 90m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

2. 解析図の西側、北の新家から福屋、南陽町福田前新田にかけて標高 -1.8m 以上で長軸方向の長さ約 5.0km 以上で、北の新家付近で谷の最大幅約 1.0km の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

3. 解析図の北側、千音寺には谷の長軸方向が北から約 50 度東に傾き、谷の最大幅約 440m、谷の長さ約 1km 以上の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

4. 解析図の北側中央、先の千音寺でみられた谷の東、島井町、服部、吉津において谷の長軸が北から約 15 度西に傾き、谷の最大幅約 340m、谷の長さ約 780m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

5. 解析図の北側中央、万場にかけて西の標高 -1.4m ～ -0.2m までに谷の長軸方向が北から約 50 度西に傾いた谷の最大幅約 560m、谷の長さ約 420m の谷地形がみられる。この谷の中を現在の新川が流下している。

6. 解析図の北側中央、大地から岩塚町にかけて標高 -1.4m ～ -0.8m までに谷の最大幅約 680m、谷の長さ約 850m の谷地形が認められる。この谷の中を現在の庄内川が流れる。

7. 解析図の北側東、岩塚町、並木、烏森町から榎前町方向へ向かう標高 -1.4m ～ -0.2m までに谷の最大幅約 1.3km、谷の長さ約 1100m の谷地形が認められる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

8, 解析図の北東、八田において、標高 -1.4m ～ 0.8m までに谷の長軸方向が北から約 70 度東に傾いた谷の幅約 370m、谷の長さ約 1000m の谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

9. 解析図の中央西より、供米田には北の春田から供米田にかけて標高 -1.4m ～ 0.2m の閉曲線からなる島状地形の南端に、谷の長軸方向

が北から約65度東へ傾いた谷の幅約120m、谷の長さ約300mの谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

10. 解析図の南西側、西蟹田には西から北側を島状の4つの地形に囲まれて標高-1.8m～-1.2mまでに谷の長軸方向が北から約50度西に傾いた、谷幅約850m、谷の長さ約510mの谷地形がみられる。現在、この谷の中を流下する河川はない。

11. 解析図の南東側、北の大当郎、中郷から中島新田、東起町、小碓、明正、土古町、当知、入場にかけて標高-1.8m～-1.6mまでに、谷の長軸方向が北から約15度西に傾いた谷の最大幅約1900m、谷の長さ2900m以上の谷地形が認められる。この谷の中を現在の庄内川と荒子川が流下している。

（2）-2　地籍図と等高線図の古地形解析結果の対比

1884（明治17）年に作成された地籍図を用いた古地形の解析結果と、現在の標高値を基に描画した地形等高線図による解析結果との対比を行なった。なお、解析に用いた地籍図の範囲は東西約3.5km、南北約4.5kmの範囲、等高線図の範囲は東西約5.85km、南北約5.88kmであり、等高線図の面積の方が大きく、地籍図の範囲は等高線図の面積全体の51.3%分を表している。具体的には、等高線図の庄内川流路よりも東約1.76km分にある荒子川周辺域や、等高線図の福田川流路よりも西約0.73kmの距離分が地籍図には表れてこないことをお断りする。

古地形の対比にあたり、微高地と微高地との間で従属的に現れる低地ではなく、低平な地表に凸地形となって現れる微高地に着目した。地籍図の北西端にある微高地群Aの範囲は等高線図では千音寺付近の谷地形にあたり、等高線図には表れてこない。地籍図の北にある微高地群Bは等高線図の千音寺や服部に認められた凸地形にあたり対応関係がみられる。地籍図の北東端にある微高地群Cは等高線図北部の万場付近の凸地形に対応する。地籍図の中央より北西寄りの微高地群Dや、新川流路北側にみられる微高地群E・F・Gにそのまま対応する等高線図による地形はみられないものの、微高地群Dの北側部分や微高地群E・Fは等高線図の北部の吉津付近に認められる凸地形に対応しているようである。なお、新川流路により切られる微高地群Eにあたる地形は等高線図には認められない。地籍図の主に戸田川の流路沿いに設定された微高地群Hについて、特に微高地群Hの南側半分は等高線の戸田川流路沿いの春田、供米田、かの里に認められた島状に周りよりも標高の高いところにあたり良い対応関係を示している。地籍図の中央、新川の流路沿いに設定された微高地群Iに対応する地形は等高線図にはみられない。地籍図の中央部、新川と庄内川とに挟まれた地域に設定された微高地群Jは等高線図の前田西町や富田町榎津にみられる島状に標高の高いところに対応している。地籍図の中央東端、庄内川流路沿いに設定された微高地群Kに対応する等高線図に現れる地形はみられない。地籍図の南西端の微高地群Lにそのまま対応する等高線図の地形はみられないものの、微高地群Lの東端の一部が等高線図の戸田川流路沿いの富永でみられる島状の凸地形に対応している。地籍図の南端、戸田川と庄内川とに挟まれた範囲に設定された微高地群M・N・O・P・Qについて、等高線図には対応する地形が現れない。地籍図の中央部北東寄りにある微高地群Rは、等高線図の中央付近で新川と庄内川との挟まれた長須賀に良く対応している。地籍図の南端、新川と庄内川との合流部に設定された微高地群Sは等高線図の南端の江松、下之一色、船頭場にかけて認められる島状に標高の高い範囲と良く対応している。

以上をまとめると、地籍図に設定された微高地群と等高線図に認められた周りよりも標高の高い凸状地形について、両方ともに対応関係がみられたところとして微高地群B・C・D・E・F・G・H・J・L・R・Sの11微高地群が対応している。いっぽうで、地籍図の微高地群A・I・K・M・N・O・P・Qの8微高地群については、等高線図にはまったく現れなかったり、周りよりも標高の低い谷地形の中となってしまうところもみられた。

（2）-3　微高地群と地形分類の対応と推定される古環境

地籍図により設定された微高地群と低地部と

の組み合わせを基にして第２章では 14 の地形を区分し、その古地理を推定した（図 2）。ここでは、それらの地形分類と等高線図の凸地形との関係性と、それから推定される古環境について、地形の空間的配置から推定を試みる。なお、地質学では地層の層序の垂直的な層相変化に基づき古環境を推定するのが本来だが、筆者らの手元には参考となるような地質学的データが圧倒的に少ないため、地形の空間的な配置のみからの推定であることをお断りしておく。

先ず地籍図から設定された微高地群と等高線図の凸地形とがとても良く対応したところは２地点しかない。それは地籍図の微高地群 C・D と低地部 B からなり地形３とされたところと、微高地群 D・E・F・G・L・H と低地部 C からなり地形４とされたところである。等高線図にも地形３とされたところには吉津や万場にかけてみられた凸地形が認められるが、特に地形４については戸田川流路沿いの春田、供米田、かの里の島状の地形の連なりとして明瞭に現れている。地形４は『冨田荘絵図』にも「春田里」や「包里」として描かれており、さらに名古屋市による戸田遺跡の発掘調査地点にもあたり、本地点が 13 世紀から現在にいたるまでヒトの生業活動に適した場所であった可能性が高い場所であると指摘できる。地形 1・2、5 ～ 8、13・14 は微高地群と等高線に認められる凸状地形とに一部対応関係がみられるところである。特に地籍図において宅地を含まずに畑地の分布のみから設定された微高地群 I は等高線図にはまったく現れず、現在の標高値のみからの推定では描画の限界にある微高地を地籍図が描き出している可能性がある。その最たるものは地籍図の微高地群のみに現れて、等高線図にはまったく現れなかった凸地形がある。微高地群 K・M・N・O・P・Q の組み合わせからなる地形 9・10・11・12 である。これらは『冨田荘絵図』に描かれた庄内川の流路と推定されるが、特に微高地群 K・M・N・Q からなる組み合わせから、それらに囲まれた範囲にはかつての河道と思われるものが明瞭に現れた（図 2）。これは 18 世紀後半以前の瀬替え前の旧庄内川の流路跡と推定される。等高線図からの解析スケールでは判明しなかったものが地籍図の解析から得られた好例であろう。地籍図から設定される微高地群と等高線図から得られた凸地形とが一部対応した地形 1・2、5 ～ 8、13・14 は、それぞれ『冨田荘絵図』や『正保国絵図』に描かれる庄内川や五条川の流路とそれらがつくる低地が現れているものと思われる。

さて、ここで特筆すべき事項として微高地群 S と低地部 N の組み合わせから設定された地形 14 がある。この微高地群 S に対応するのが等高線図の南端、新川と庄内川との合流部付近において島状に標高の高い江松、下之一色、船頭場にかけて認められた島状地形である。現在の新川はこれらの島状地形との間を抜けて南の伊勢湾へ向けて流下している。この島状地形の成因について、先ず新川が河川流路沿いに形成した自然堤防である場合がある。これに関して、新川は 1784（天明 4）年から 1787（天明 7）年にかけて現在の位置に新川が開削された歴史があり、人工的な日の浅い河川流路であることから、自然堤防を形成するのに十分な時間が経っていないことがあげられる。実際、江松、下之一色、船頭場よりも北側の範囲には、富田町榎津において新川の流路に沿う凸地形が認められるものの、江松や下之一色などでみられる凸地形に比べて面積は小さく、また富田町榎津以外には新川の上流や下流には河川流路に沿う凸地形はみられない。新川による自然堤防である可能性は低いと思われる。では、その地形の成因は何であるかの疑問が残る。それについては問題提議したいため後述し考察を行う。いずれにせよ、地籍図の解析による地形 14 として設定されたうちの微高地群 S には、等高線図の江松、下之一色、船頭場にかけて認められる島状に標高の高い地域が対応する。（鬼頭）

4. 名古屋市中川区の遺跡と古地形

（1）名古屋市中川区の遺跡分布と古地形

名古屋市中川区戸田地区周辺の遺跡について述べる（図 4 参照）。庄内川以西の北から名古屋市中川区富田町大字千音寺に千音寺遺跡（1）があり、奈良時代の溝、土坑など、鎌倉時代～室町時代の溝や土坑、井戸などが確認されている。同戸田一丁目・戸田二丁目には、平安時代

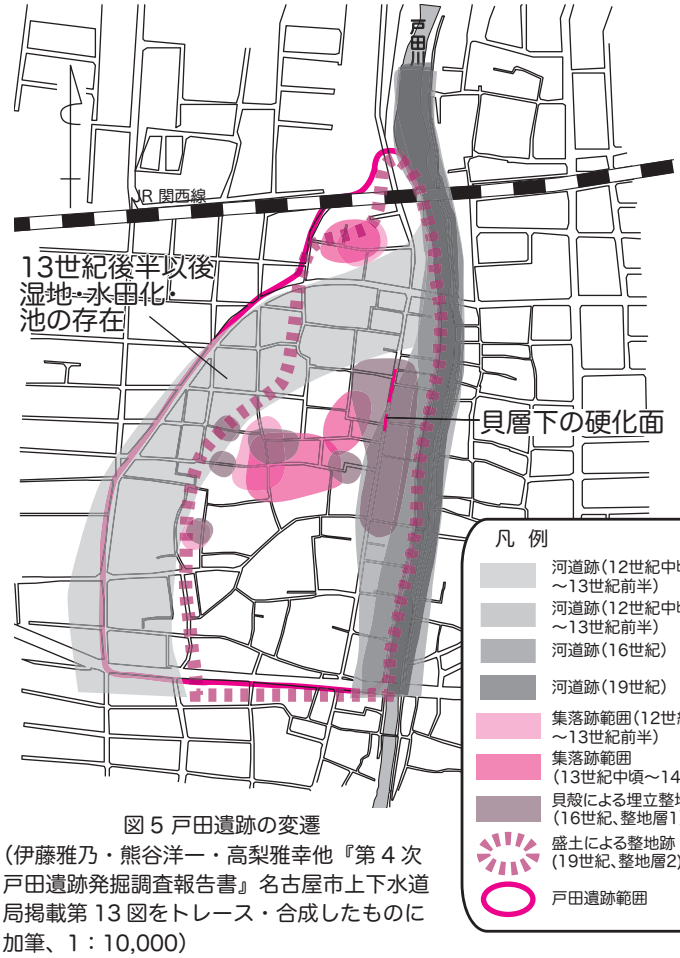


図５ 戸田遺跡の変遷
（伊藤雅乃・熊谷洋一・高梨雅幸他『第４次戸田遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局掲載第 13 図をトレース・合成したものに加筆、1：10,000）

後半～江戸時代の戸田遺跡（2、以前は戸田城跡（3）・戸田Ｂ遺跡（4）に分けられていた）があり、戸田川を挟んで東の同春田四丁目に戸田Ａ遺跡（5）がある。同かの里一丁目～かの里三丁目には包里遺跡（6）、同伏屋二丁目には伏屋遺跡（9）があり、平安時代～室町時代の灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸の陶器などが採集されている。戦国時代の城館跡では、戸田遺跡内の戸田一丁目に戸田城跡（3）、同冨田町大字榎津に榎津城跡（8）、同伏屋三丁目に助光城跡（11）、同前田西町一丁目に前田城跡（10）、同江松三丁目に江松城跡（7）、同下之一色町に下之一色城跡（12）がある。

庄内川以東では、北から名古屋市中村区小鴨町に古墳時代の岩塚１号墳（14）～岩塚３号墳（16）があり、戦国時代では同岩塚町新屋敷に岩塚城跡（17）、名古屋市中川区東起町４丁目に東起城跡（13）がある。

当地域の遺跡の分布は、名古屋市中村区から中川区の北西部にかけて古墳時代から奈良時代の遺跡が広がり、平安時代以後に中川区の南側へと遺跡が展開する傾向がみられる。先の地形変遷の中では（図２参照）、地形１・地形２に関わる微高地群Ａに千音寺遺跡（1）がある。地形４・地形６に関わる微高地群Ｈに戸田遺跡（2、戸田城跡（3）を含む）と包里遺跡（6）、地形７・地形８に関わる微高地群Ｊと地形 13 に関わる微高地群Ｒが重複する地点に伏屋遺跡（9）がある。また地形７・地形８に関わる微高地群Ｊに榎津城跡（8）、地形８に関わる微高地群Ｋに前田城跡（10）と助光城跡（11）がある。奈良時代以前の千音寺遺跡（1）が存在するのは最も形成時期が古いと考えられる地形１・地形２に関わる微高地群Ａに限られ、平安時代以後の遺跡がより南側に分布する地形４～地形８に関わる微高地群Ｄ～微高地群Ｋに立地する。

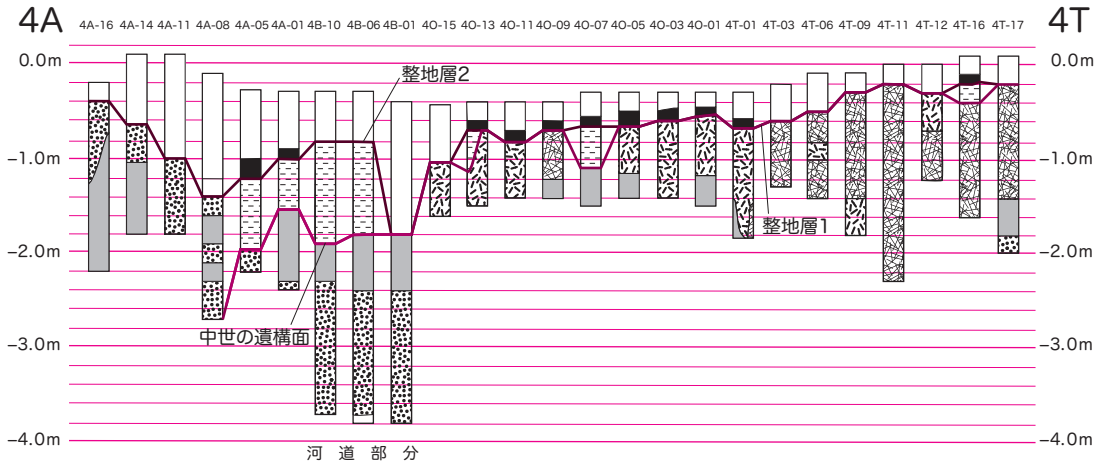
自然科学的分析による調査では、千音寺遺跡の第６次調査の No.3 区で遺跡の自然基盤層と考えられる６層（2.5Y5/2 ～ 4/2 暗灰褐色砂質土）出土のイヌエンジュの生材の AMS 放射性炭素測定年代が BC360-201cal、第７次調査の No.11 区で周辺の旧河道に由来する堆積層と考えられる５層（10YR5/1 褐灰色砂シルト質土）出土のヤナギ属の生材の AMS 放射性炭素測定年代が AD671 ～ 770cal との分析報告があり（木村 2015）、千音寺遺跡の立地する基盤層の形成年代の一旦を知ることができる。

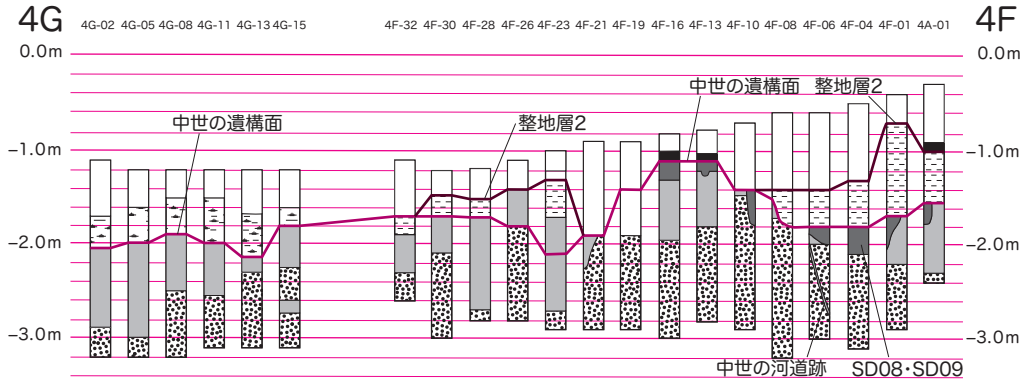
（２）名古屋市中川区戸田遺跡の調査成果

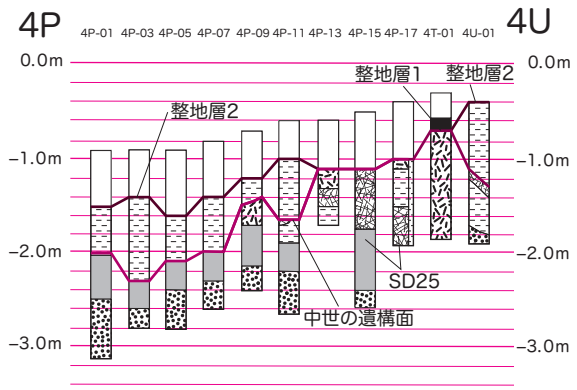
先に述べた遺跡の中で、発掘調査が行われた遺跡に戸田遺跡（2）と千音寺遺跡（1）があり、本論の分析で大きく関わる戸田遺跡について検討したい。

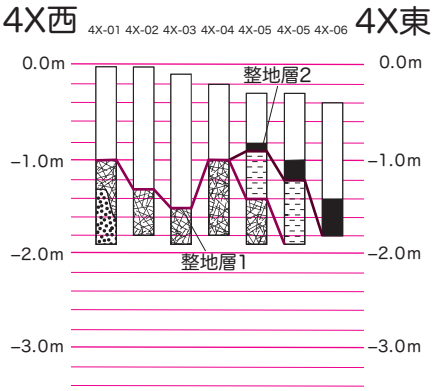
戸田遺跡の発掘調査報告では、古地形と遺構の変遷について４つの時期に検討されている（図５・図６）。

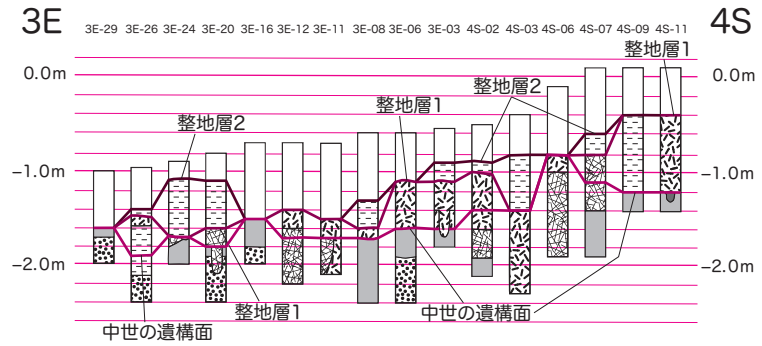
中世の遺構が形成される時期は 12 世紀中葉以後で、4F 区中央部・4C 区北側と 4P 区東側・4Q 区・4R 区・4S 区・3A 区～３E 区・１次区の標高 -2.4m ～ -1.0m にかけて認められ、標高 -2.0m ～ -1.7m より高い地点に遺構が認められる。特に標高 -1.6m より高い 4P 区東側・4Q 区・4R 区東側・4S 区・3E 区北端部・3E 区南端部・１次区において 13 世紀～ 16 世紀の遺構と出土遺物が多数確認されている。

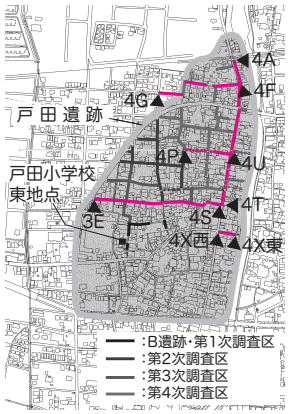












凡例

砂層	貝を含まない層
シルト(地山)	硬化面
遺構	耕作土
貝層	表土など
貝を含む層	

伊藤雅乃・熊谷洋一・高梨雅幸他2005
『第4次戸田遺跡発掘調査報告書』
名古屋市上下水道局 掲載第8図〜第11図
を参考にトレース・加筆
中世の遺構面・整地層1・整地層2の上面のラインは本分析による加筆で、中世の遺構面は報告書の記述をもとに加筆した。柱状図の図化位置の違いと地層分類の理解の違いにより地層の種類と対応しない部分がある。

図6　戸田遺跡模式柱状図

続く 13 世紀～ 14 世紀は、度重なる洪水と戸田川の流路の移動が推定される時期で、4A 区南側・4B 区・4O にかけての地点からその南西にある 4C 区・4H 区～ 4K 区・4M 区・4N 区・4P 区西側にかけて流下する河道が推定されている。

3 番目の時期は、16 世紀に形成された整地層 1 で、15 世紀～ 16 世紀の遺物を包含して、ほぼ貝殻のみの貝層、破砕した貝殻層、貝殻にシルトと砂が混入する混貝土層からなり、戸田川に沿った 4O 区・4T 区・4X 区に認められる。整地層 1 は中世に現在より幅広く流れていた戸田川が現在の戸田川の川幅まで西岸を埋め立てられたものと推定されている。

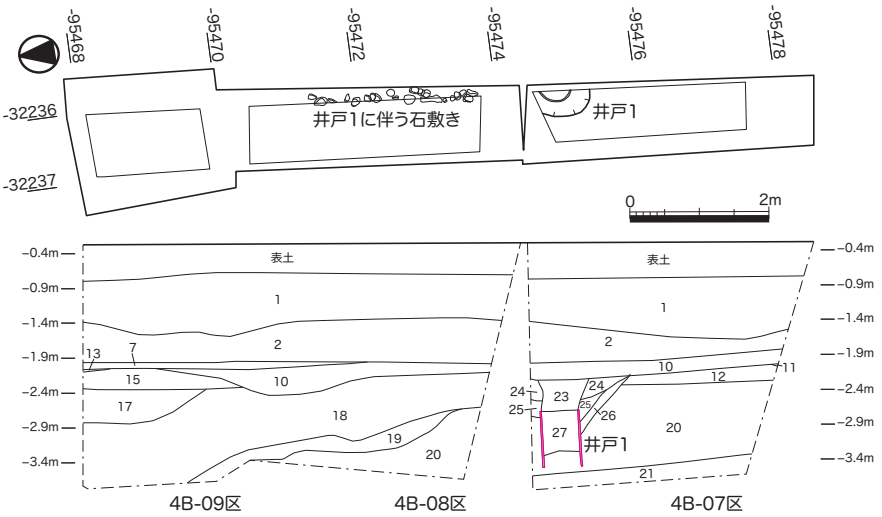
4 番目の時期として、江戸時代後期以後に形成された整地層 2 がある。整地層 2 は、表土下にある旧道路面と推定される硬化面（標高 -1m ～– 0.6m）とその硬化面の下にある 18 世紀～ 19 世紀の遺物を包含する粘土・シルト層である。現在に続く町並みの基盤層が形成されたものと理解されている。

（3）戸田遺跡における中世河道について

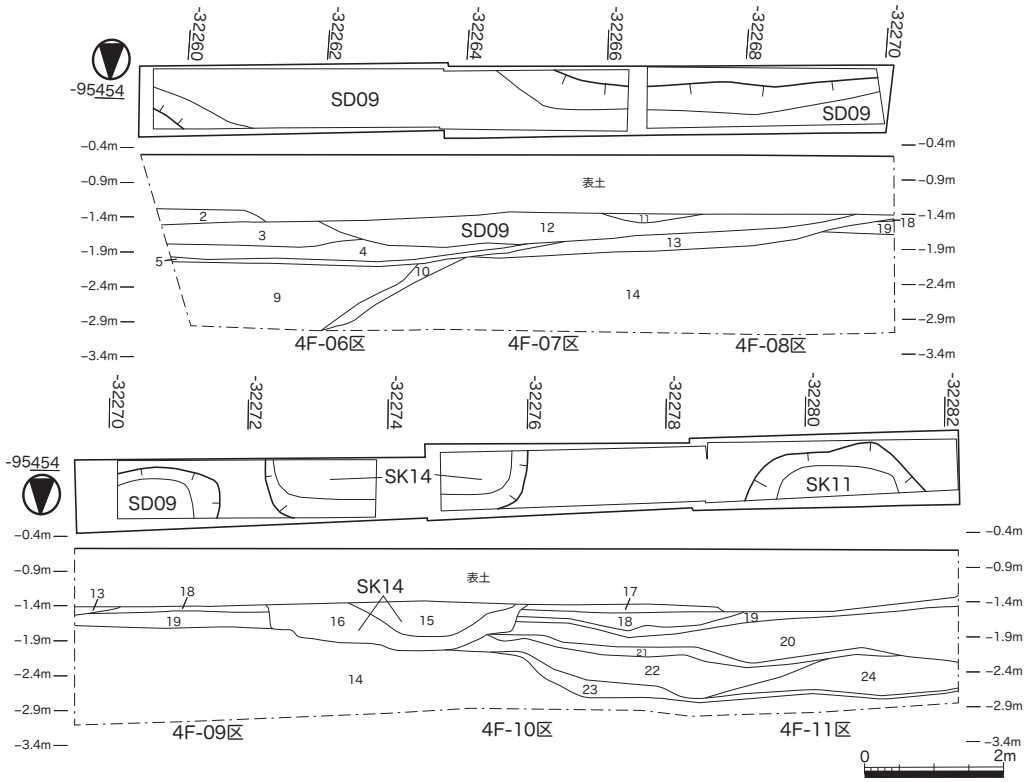
先に述べたものは、ほぼ確認された調査成果に基づくものであるが、戸田遺跡の北側で推定された中世の河道について、4B 区で確認された中世河道（底面）と 4P-11 区の標高 -2.4m ～ -1.9m にある砂質を帯びた有機物腐食土層（4P-11 区 6 層～ 8 層）から 13 世紀中葉～ 16 世紀後葉の山茶碗・陶磁器などの出土について異なる理解が想定できるため、検討したい。

まず、4P-11 区で確認された砂質を帯びた有機物腐食土層は 4P-9 区から以東の 4P-11 区・4P-12 区・4P-14 区・4P-15 区・4P-17 区に確認されるもので、西にある 4P-1 区～ 4P-8 区の標高 -2.3m 以下に堆積する砂層においても木片などを含むことから河道や河道に伴う湿地が推定されたものである。これらの調査成果について個別に述べることできないが、砂質を帯びた有機物腐食土層は最も東にある 4P-17 区の SD25 とされる 16 世紀の溝状落ち込みに伴う地層と考えられ、4P-17 区から東西に 30m 以上確認される有機物腐食土層は全てが連続するわけではないが、4P 区の標高 -2.4m 前後からみられる砂層を底面とする遺構と考えられないであろうか。これと関連して、4F-1 区で確認された 16 世紀の溝 SD08 とその西 4F-2 区～ 4F-9 区に確認された 13 世紀の溝 SD09 は報告では SD08 が SD09 より新しい重複関係を確認されているが、検出された遺構平面と土層からは同一の遺構である可能性があるものである（図 7）。また 4F 区中央部から西側では、4F-16 区・4F-17 区で確認された 15 世紀後半の南北溝 SD13 をはじめ、中世の土坑や溝などが多く確認されている。特に 15 世紀後半～ 16 世紀にかけての溝は比較的規模が大きく、また軸線が類似するものが多い。これらの溝は、4F 区と 4P 区の間で 4N 区・4M 区の西にあたる地点で村絵図に記述される「古城」、戦国時代の戸田城跡に関わる遺構の可能性があり、4N 区・4M 区では明確な遺構は確認されなかったが、調査された遺構面は標高 -1.5m ～ -1.0m と最も高い地点である。

次に 4B 区付近の戸田川から南西にのびる旧河道は、4B 区おいて標高 -2.4m 前後から下にみられる砂層の下面にあたる標高 -3.9m に河道底面（底面は砂粒を多く含む粘質土で上面には径 1cm ～ 3 cm の小礫が堆積する）が確認され、その河道底面には 12 世紀中葉～ 13 世紀前半の完形の山茶碗が伏せた状態で複数出土したことと、周囲の 4A 区南側・4O 区の堆積状況とその南西にある 4C 区・4H 区～ 4K 区・4M 区・4N 区・4P 区西側の遺構の検出状況などから、河道が推定されているものである。この河道の堆積状況は、標高 -2.4m 前後から下にある黄褐色～褐色砂層は北に傾斜する堆積状況をもっており、砂層の上に黄褐色砂・黄灰色砂を混入する黒褐色粘土層が標高 -2.2m ～ -1.9m に砂層を挟みながら埋没するもので、その上に先に述べた 4F 区の 16 世紀の SD08 や 4B-07 区の井戸 1 が検出されている（図 7）。また 4A-15 区の標高 -0.9m ～ -1.0m にて確認された 13 世紀頃の土坑 SK03・SK04 がある地点では、河道は立ち上がっているものと思われる。また 4B 区の西にある 4F 区の堆積を検討すると、4F-6 区の西側で黄褐色砂層（東側の 9 層と西側の 14 層）に挟まれて東に傾斜する暗灰黄色砂質シルト（10 層）の堆積がみられる。4F-8 区東側地点において、4F-11 区の黄



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト,鉄分の沈着
2. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト,砂粒を多く含む
7. 2.5Y5/3 黄褐色砂,暗灰黄色粘土を混入する
10. 5Y3/2 オリーブ黒色砂質シルト
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂
12. 2.5Y5/3 黄褐色砂,暗灰黄色砂質粘土をブロック状に混入する
13. 2.5Y3/2 黒褐色粘土,黄褐色砂を混入する
15. 2.5Y3/2 黒褐色粘土,灰黄色砂を混入する
17. 2.5Y5/3 黄褐色砂
18. 2.5Y5/4 黄褐色砂
19. 10Y4/6 褐色砂
20. 2.5Y5/3 黄褐色砂
21. 10Y4/6 褐色砂
23. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト
24. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト,23層と比べ砂粒少ない
25. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質シルト,灰色砂を混入する
26. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
27. 7.5Y6/1 灰色砂



2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土
3. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト,鉄分を沈着
4. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト,鉄分を沈着,雲母含む
5. 2.5Y3/1 黒褐色粘土,砂粒をほとんど含まない,木片等の有機物を包含する
9. 2.5Y5/3 黄褐色砂
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
11. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト
12. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト,灰黄色粘土をブロック状に混入
13. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトと砂の混土層
14. 2.5Y5/3 黄褐色砂
15. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト,1～3cm大のブロック状に黄褐色シルト・砂を混入する,SK14覆土
16. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂を基調とし,黄褐色シルトをブロック状に混入する,SK14覆土
17. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト,きめが細かい砂との互層
18. 2.5Y5/3 黄褐色砂
19. 2.5Y5/3 黄褐色シルト,鉄分を沈着する
20. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂,部分的に鉄分が沈着
21. 10YR4/3 にぶい黄褐色きめが細かい粘土と砂が交互に堆積する
22. 2.5Y6/2 灰黄色砂
23. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト
24. 黒褐色粘土と黄灰色砂が交互に堆積する

図７　戸田遺跡（上図）4B-07 区～ 4B-09 区、（下図）4F-06 区～ 4F-11 区（1:100）

褐色砂層(14 層)の上を東に立ち上がる黒褐色砂質シルト層（23 層）より上層にある黄褐色砂（18 層）・黄褐色シルト層（19 層）までが上に被って堆積する。4B 区の河道が 4F-6 区の黄褐色砂層（14 層）を含むものであれば、4F-6 区より西にある 4F-7 区～4F-19 区において確認された中世の遺構も 4B 区からの河道の上に位置することから、中世東側に傾斜する堆積層と西側に傾斜する堆積層は別の流路堆積によるものと思われる。よって先に述べた 4F 区中央部から西側では、13 世紀から 16 世紀にかけての遺構が多く確認されている点、その南の地点に戦国時代の戸田城跡の存在も想定できることから、4B 区の標高 -3.9m で確認された河道は、戸田川の西岸にある 4B-13 区より 30m 西の 4F-8 区東側で立ち上がるものと考えられる。このように考えると、4O 区・4T 区・4U 区・4V 区・4W 区・4X 区の標高 -1.0m 前後にて検出される貝殻を含む整地層 1 は 16 世紀の遺構上部に堆積する貝層に続く可能性はあるが、先に述べた 4F 区の 16 世紀の SD08 や 4B-07 区の井戸 1 の遺構上面が標高 -1.8m ～ -1.5m にあること、整地層 2 との前後関係が不明であることから、整地層 1 は江戸時代以後の形成の可能性が高く、現在の戸田地区周辺の伊勢湾沿岸部の町に普遍的に認められる近代以後の整地地行に類似するものである（大野・蔭山・鬼頭 2015）。

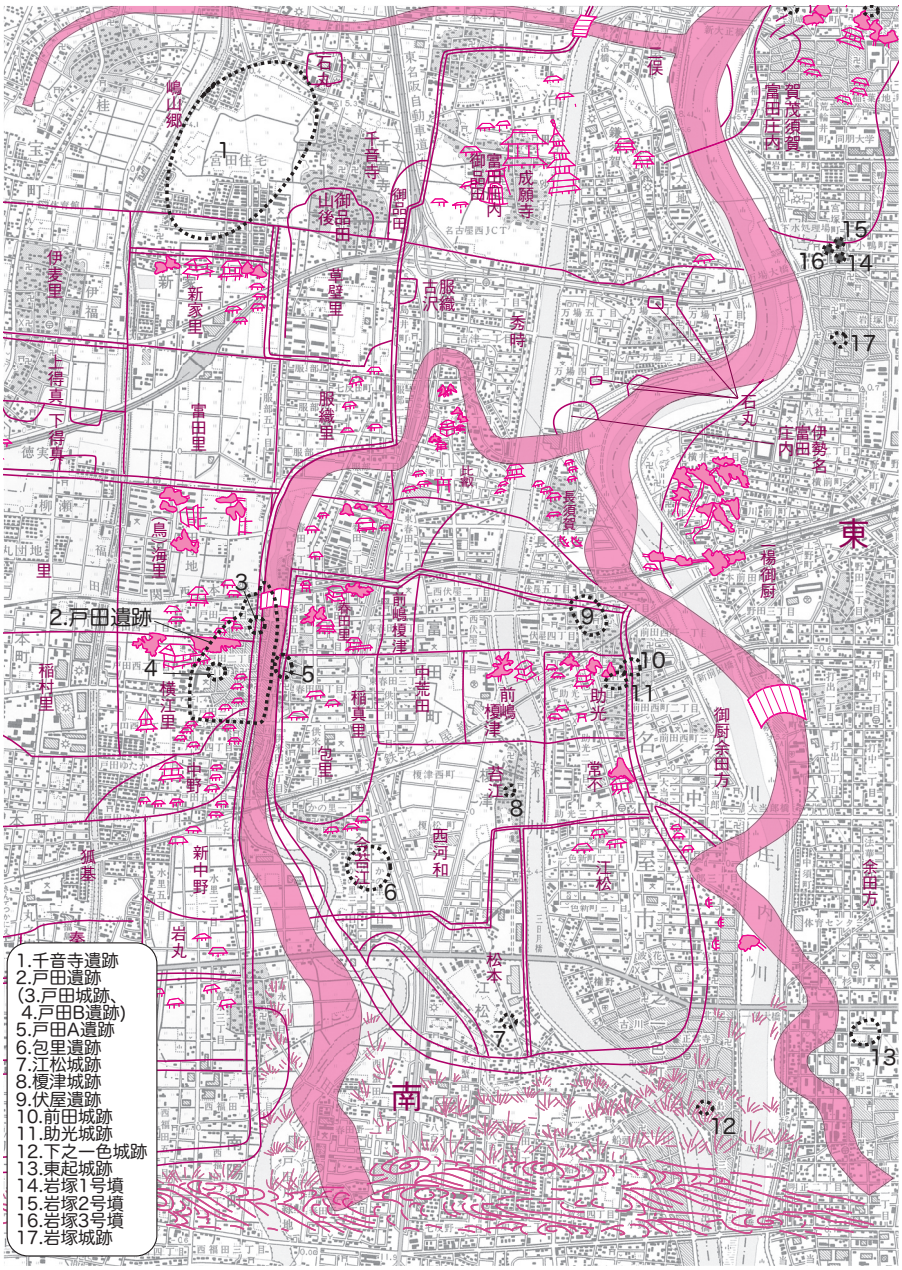


図 8　名古屋市中川区戸田地区における尾張国冨田荘絵図の想定（約 1：37,500）

最後に地籍図（図 2）との対応関係を検討すると、4P 区東側に確認される砂質を帯びた有機物腐食土層の地点は宅地のある部分で、微高地群 H の範囲である。4B 区付近の戸田川から南西にのびる旧河道は 4A 区・4B 区・4O 区・4P 区東側は宅地で微高地群 H の範囲であるが、その西側 4C 区・4H 区～ 4K 区・4M 区・4N 区・4P 区西側は田の部分で低地部 C の範囲にあたり、地形図の解析においても南北の微高地状高まりの中にある北東から南西への谷状地形を示す。また、先に述べたようにこの地区で遺構や出土遺物が少ないのも、谷状地形に示される窪地となり中世においても人が住む居住域としての利用は少なく、水田域や湿地などの景観となっていたものと思われる。（蔭山）

5.『冨田荘絵図』における建物と海

（1）『冨田荘絵図』に描かれた建物と遺跡の関係

名古屋市中川区戸田地区の分析結果と『冨田荘絵図』の情報を大凡合わせたものが図８である。この想定図は、現在の福田川の位置、地籍図などの解析による戸田川と庄内川の位置、地籍図の村境・現在の町境などをもとに推定しており、千音寺遺跡が「嶋山郷」の南側に、戸田遺跡が「横江里」の東側を中心に北は「鳥海里」の南東隅部、南は「中野」の北東側に、包里遺跡が「今苔江」と記載ある箇所に、伏屋遺跡が「助光」の北にある無記載の箇所に当たる。当時の実態がどの程度反映されたものかわからないが、建物が描かれている戸田遺跡、建物が描かれていない千音寺遺跡、何も記載がない伏屋遺跡と絵図における扱いが異なることが分かる。愛知県あま市の旧海部郡七宝町域においても、中世の遺物が表面採集できる地点で、『冨田荘絵図』に建物が描かれた箇所と描かれない箇所があり（蔭山 2005）、『冨田荘絵図』において複数の描き分けがあるものと思われる。

中世における遺跡の変遷はあるが、中世の遺物が表面採集できる遺物包含地としての遺跡や発掘調査が実施されて中世の遺構が残る遺跡では人々の営みが存在したものと考えられる。よって、この描き分けの基準として、描かれたものは冨田荘に関わる施設や建物、描かれなかったものは冨田荘外の建物と冨田荘に居住する一般庶民の建物と想定したい。（蔭山）

（2）想定される海側環境とその理解

本論で解析対象とした冨田荘のある名古屋市中村区、同市中川区、あま市（旧海部郡甚目寺町）、海部郡蟹江町は濃尾平野の南東端にある。濃尾平野の愛知県側は犬山市付近から西に沖積平野がひろがり、上流部から扇状地帯、自然堤防帯、三角州帯の３地帯に区分できる。このうち冨田荘は三角州帯にあたる。等高線図による地形解析では東西約 5.85km、南北約 5.88km の範囲全体で標高 -1.8m から標高 1.0m までの等高線が描かれ、解析図の北と北東方向で相対的に高く、南と西は標高 0m よりも低い場所となっていた。また、標高 -1.4m を境にして等高線間隔が狭くて地形勾配が比較的急なところと、等高線間隔が広くて地形勾配が緩やかなところとに大きく２分された（図４）。ところで、本邦の土地の高さを示す標高は東京湾の平均海面を標高 0m の基準として測られ T.P.（トーキョーペール）と略記される。基準となる海面（平均海面）はその場所の地形や潮汐・潮流、海水温、気圧などの変動により地域ごとに異なる。伊勢湾には名古屋港基準面（N.P.）があり、東京湾平均海面（T.P.）よりも 1.412m 低いことが知られている。本論ではこれまで東京湾平均海面（T.P.）を用いて議論を進めてきた。より厳密に議論をするためには標高値の補正が必要である。名古屋港基準面（N.P.）を用いれば、補正した標高値（$h_{correction}$）は現在の標高の値（$h_0 = h_{TP}$）に名古屋港基準面（N.P.）（h_{NP}）分だけ加えなければならない（$h_{correction} = h_0 + h_{NP}$）。補正を加えると等高線図の解析範囲全体は標高 -0.38m から標高 2.41m までの等高線へと変換される。また、東京湾平均海面（T.P.）を用いた場合、地形勾配の緩急の変化は標高 -1.4m ラインで認められたが、それが標高 0.01m となる。加えて、解析範囲の名古屋市中川区や海部郡蟹江町は愛知県内でも有数の地盤沈下地帯として有名である。高度経済成長期に伴う地下からの揚水の影響により濃尾平野南部の地盤沈下は著しく、名古屋市中川区と港区西部では 80cm ～ 100cm 以上の沈下量を示している（東海三県地盤沈下調査会，1995）。つまり、補正標高値（$h_{correction}$）には、さらに地盤沈下した沈降量（$h_{subsidence}$）を加えなければならない（$h_{correction} = h_0 + h_{NP} + h_{subsidence}$）。沈降量を少なく見積もって 80cm とし沈降量をも考慮すると、解析範囲全体でもっとも標高値の低かった標高 -1.8m ラインは標高 0.40m となり、今回の解析範囲全体のほとんどが正の標高値（$h_{correction} = h_0 + h_{NP} + h_{subsidence} > 0$）をもつ土地となる。これは解析範囲に離水した土地がひろがっていたことを意味する。また、等高線図の等高線間隔の粗密度から『冨田荘絵図』に該当する地域には地形の傾斜がほぼ０度であるような極めて低平な土地が読み取れ、13 世紀～ 14 世紀に荘園の水田が展開していたこと

とも整合性が認められる。

さて、ここで等高線図の標高 -1.8m ～ -1.6m ライン沿いに認められた島状に標高の高い地形、具体的に言えば春田、供米田、かの里、富永、江松、下之一色、船頭場でみられる凸地形の成因を考えたい。本論の対象範囲の約 3km 南には庄内川と新川とが現在の伊勢湾に注ぐ河口となっている。新川と庄内川との合流部にある江松、下之一色、船頭場地域に認められた島状に標高の高いところは東西方向に配列しており、北から南へ南北方向に流下する新川や庄内川の河川流路に沿って配置しているというよりも、その平面的な配置と形状から海岸沿いにならぶ砂堆地形と考えることもできる。ところで、これまでの調査・研究の中には砂堆と浜堤とをまったく同じものであるかのように認識されている例が見受けられるため、ここで説明を加えておく。水や大気などが砂や泥といった堆積物を運ぶとき、その堆積物の表面において、その上を流れる水や大気の流れにより形成される面（これを堆積面という）には少なからず凹凸状の起伏が生じる。その起伏の総称を砂堆という（ミッドルトン，1965）。対して、浜堤は海水の波（専門的には波浪と呼称する）の影響のつよい環境で形成され、波によって打ち上げられた砂礫が波の到達する上限付近に堆積し小高い高まりをつくり、海岸線に平行な列をなして連なるものと定義される（ベイツ＆ジャクソン，1987）。要するに浜堤が海の波の影響でつくられるのに対して、砂堆とは海底でも、河川や湖の底でも、流れがあればどこにでも形成される堆積地形のことを指す。浜堤は成因を限定するが、砂堆は河川・潮流・波浪や海流の流れがつくる砂州、沈水した沿岸州など、その成因や規模は問わない用語であることに注意しなくてはならない。本論では堆積地形の空間的な配置のみから議論を展開しており、地層の層序関係や地層に観察される堆積構造に基づいたものではなく、成因についての詳細がわからないため砂堆の用語を使うのである。さて、『冨田荘絵図』には「江松」や「松本」と描かれた海側（南側）に、並行する２本の曲線で描かれた南へ凸となる堤防状の高まりが描かれている。その高まりの一端が江松、下之一色、船頭場で認められた島状の地形にあたるのかも知れない。『冨田荘絵図』の「江松」の南に描かれた堤防状のものは海と干拓地とを境する堤防であるとの解釈が歴史学の研究者よりなされている（板倉，1952；村岡，1998）。歴史学による『冨田荘絵図』から解釈した干拓地の堤防は、地質学的にはもともとその地にあった周りよりも標高の高い凸状の砂堆地形を利用したものと捉えられる可能性を指摘できる。

さて、『冨田荘絵図』の「江松」や「松本」の海側（南側）に描かれた堤防状をした凸地形の、さらに南側には草本植物と想像される植生と、さらに南には海が描かれており、河川と海とが交わる場所が『冨田荘絵図』には表現されている。河川と海との相互作用で形成される堆積地形の典型的なものが三角州（デルタ）である。とくに三角州が海に臨む漸移帯では河成作用と海の諸作用とが複合してさまざまな微地形がつくられる。三角州が形成されるその成因に関する議論は欧米において 1970 年代以降から発展してきており、三角州の地形的な特徴や堆積様式には３つの環境要素が起因していることがわかってきた。ひとつは陸上から流下してくる河川の運搬力、さらに海の波浪の力、そして海水の干潮・満潮による潮汐力があげられる（ギャロウェイ，1975；バタキャリヤ＆ウォーカー，1992；ギャロウェイ＆ホブデイ，1996）。たとえば、河川が卓越する例としてアメリカ、ミシシッピ河の河口に位置する三角州が知られている。ここでは河川の運搬力が他の２つの要素より勝っており、三角州はたえず海側に向かって前進している（ライト，1978；コールマン，1981）。いっぽう、干満の影響をつよく受ける場所では潮汐優勢の三角州が形成される。このタイプの三角州表層では干潟からなる平坦面と、三角州前面に形成されたバリアー島の発達などが特徴としてあげられる。波浪の影響が優勢する三角州では、波浪の営力により三角州から供給された堆積物は再移動して海浜や海岸砂丘を発達させる。このように三角州は河川・波浪・潮汐という３つの環境要素を端成分として、諸作用の相対的なつよさに応じて漸移帯の地形的特徴を変えるわけである。翻って、以上のような観点から『冨田荘絵図』に

関わる地域をみた場合、どのような堆積地形環境が想定されるであろうか。『冨田荘絵図』には庄内川や戸田川に対比される河川流路が描かれており、三角州の３つの堆積要素のうち河川の運搬力が考慮されなくてはならないことが先ず理解できる。次に問題となるのは波浪と潮汐の２つの要素である。先ず波浪について考える。波浪により形成される堆積地形の代表に浜堤がある。波による水の分子運動は円～楕円運動をする振動流として伝わる。この分子運動のエネルギーは海底にたまった堆積物表面との摩擦により減衰する（ライト＆コールマン，1973；クリフトン，1976；クリフトン＆ディングラー，1984）。海底の堆積面との接触が少ないほど波のもつ運動エネルギーは衰えることなく伝わるのである。例えば、現在の日本でみられる浜堤には千葉県の九十九里浜や新潟県の新潟平野、愛知県渥美半島から静岡県の御前崎にいたる遠州灘など、外洋に面して陸から海に向かい急激に水深の増す場所で波浪による堆積地形が顕著となるのである。対して、海の水深が浅い場合には、海底との摩擦により波の運動エネルギーは減衰する。ところで、地形解析を行なった範囲の南端から約 3km 南では現在、庄内川と新川が伊勢湾に注ぐ。河口には 2002（平成 14）年にラムサール条約に登録された藤前干潟がひろがっている。一般的に干潟は、波浪の影響を受けにくく、外洋にくらべて波が穏やかなところで形成される。現在みられる堆積地形が過去にも存在したとは一概に言えないものの、九十九里浜や遠州灘のような浜堤がかつてひろがっていたとは想定し難く、少なくとも波浪のみが卓越する典型的な波浪卓越型三角州ではないと思われる。いっぽう、潮汐が優勢な三角州の場合、海の干満の影響を受ける。陸と海とが接する海岸は干満の影響により、満潮時に海水面よりも高い場所を潮上帯とし、大潮の干潮時にも常に水中にある場所を潮下帯、満潮時には海水中に没し干潮時には大気にさらされるような潮上帯と潮下帯の中間にある場所を潮間帯という。干満による海水面の上昇・下降により特徴的な堆積地形が形成される。陸と海との境界である海岸から直交方向の海側へ向かい、潮上帯には塩性湿地（ソルトマーシュ）と呼ばれる耐塩性の草本植物が繁茂する地形が、潮間帯には陸から海へ向かい泥質干潟から混合干潟、そして砂質干潟がこの順番に並び、さらに常に水中にある潮下帯には潮汐チャネル（流路）というように、出現する堆積地形は段階的に移り変わるのである。ところで、『冨田荘絵図』の「江松」や「松本」の堤防状のさらに海側（南側）には海との間に草本植物の繁茂状況が描かれていた（図 1）。海と草本植物という組み合わせから、草本植物が描かれたところは地質学的には潮上帯における塩性湿地を描いているものと指摘できる。さらに『冨田荘絵図』の南端に描かれた海は、そこから潮間帯となる場所にあたり、海が描かれているその下には干潟環境が隠れていると推定できる。遠浅の干潟環境に現れる潮上帯の塩性湿地帯を農業の耕作地へと転換させるいわゆる干拓が、洋の東西を問わず歴史的に古くから慣行されてきた。『冨田荘絵図』の「江松」の南に描かれた堤防状のものが海と干拓地とを境する堤防であるとの歴史学者による解釈を先に述べたが、地質学的に想定される堆積地形も干潟環境という干拓の適地であったと指摘できる。ところで、『冨田荘絵図』に描かれた地域の地理学的な研究には自然地理学を専門とする安田喜憲による航空写真判読と古文書の記載を基に庄内川下流地域の河道変遷と微地形を分類したものがある（安田，1971）。安田（1971）では三角州（デルタ）の形成を主に河成作用を重視して考察した。本論でも述べたように、三角州（デルタ）をつくる環境要素のひとつとして河川の影響は重要であるが、ほかにも潮汐の影響、堆積物の供給量、堆積物をためる受け皿となる盆地の沈下など複雑な相互作用を考慮する必要がある。そのような相互作用のひとつとして、潮汐のような海域の影響も考える必要があることを指摘したい。今回は古地形解析により現れた地形の、空間的な配置のみで考察を行なった。前述したように、三角州は河川・波浪・潮汐の３つの環境要素の組み合わせとその強弱により特有の地形が形成される。潮汐の影響がつよければ地質学的にはカレント・リップルやヘリンボーン構造といった、その環境に特有の堆積構造が地層に保存されているはずである。（鬼頭）

(3) 結びに代えて

まとめると、本論において戸田遺跡の発掘調査にある自然流路が『冨田荘絵図』に描かれた旧戸田川であることを指摘した。この事により『冨田荘絵図』は 13 世紀中頃～ 15 世紀の状態を示したものであると考えられる。また、旧河道や道・堤の位置の復元により、描かれた建物は冨田荘に関わる施設・家屋である可能性を指摘した。この建物の描き分けは、歴史学における絵図作成主題を荘園支配領域とする村岡氏と上村氏の考え方を支持する。地形解析では江松・下之一色・船頭場に島状の凸地形が並び、河成作用とともに潮汐などの海域の影響を受けた砂堆地形が想定される。今後、対象地の考古学および地質学的な調査が行われることを期待したい。最後になるが、本論が冨田荘地域を検討する際の歴史学などの他分野の研究の一助になれば幸いである。(蔭山・鬼頭)

謝辞

本論を作成するにあたり、2022 年 2 月に実施された中間発表おいて愛知県埋蔵文化財センターおよび愛知県埋蔵文化財調査センターのスタッフの方々からはご批判・ご意見を賜り、とくに愛知県埋蔵文化財調査センターの石黒立人氏、愛知県埋蔵文化財センターの鈴木正貴氏、樋上　昇氏、堀木真美子氏からの建設的な助言は本論をまとめるにあたり大いに参考となった。等高線図の作成では前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

参考・引用文献

板倉勝高 1952「尾張国富田庄を例とせる日本庄園の村落構造」『東北地理 5 巻 1 号』

Middleton, G. V., 1965, Primary Sedimentary Structures and Their Hydrodynamic Interpretation, Soc. Econ. Paleontologist and Mineralogists, Spec. Publ., 12, 265p.

安田喜憲 1970「尾張国冨田庄の歴史地理学的研究」『立命館文学第 303 号』

安田喜憲 1971「濃尾平野庄内川デルタにおける歴史時代の地形変化」『東北地理』23-1,29-36

Wright, L. D. and Coleman, J. M., 1973, Variations in morphology of major river deltas as functions of ocean wave and river discharge regimes. Bull. Amer. Assoc. Petrol. Geol., 57, 370-398.

Galloway, W. E., 1975, Process framework for describing the morphologic and stratigraphic evolution of deltaic depositional systems. In Broussard, M. L., eds., Deltas, models for exploration. Houston Geol. Soc., Houston, 87-98.

Galloway, W. E., 1975, Process framework for describing the morphologic and stratigraphic evolution of deltaic depositional systems. In Broussard, M. L., eds., Deltas, models for exploration. Houston Geol. Soc., Houston, 87-98.

Clifton, H. E., 1976, Wave-generated structures - a conceptual model. In Davis, R. A. and Ethington, R. L., eds., Beach and Nearshore Processes, SEPM Spec. Publ., 24, 126-148.

Wright, L. D., 1978, River deltas. In Davis, R. A. Jr., eds., Coastal sedimentary environments. New York, Springer-Verlag, 5-68.

Coleman, J. M., 1981, Deltas : Processes and models of deposition for exploration. Burgess Publ., 1-12.

Clifton, H. E. and Dingler, J. R., 1984, Wave-formed structures and paleoenvironmental reconstruction, Mar. Geol., 60, 165-198.

金田章裕 1985「集村化現象の進展」『条里と村落の歴史地理学研究』第四章 古代・中世の村落形態とその変遷、株式会社大明堂

上村喜久子 1986「絵図にみる冨田荘の開発と形成」『名古屋短期大学研究紀要 24』

愛知県教育委員会 1986『愛知県遺跡分布地図（Ⅰ）尾張地区』

Bates, R. L. and Jackson, J. A., 1987, Glossary of Geology -Third Edition, American Geological Institute, 788p.

上村喜久子 1990「冨田荘」『講座日本荘園史５　東北・関東・東海地方の荘園』株式会社吉川弘文館
Bhattacharya, J, P. and Walker, R, G., 1992, Deltas. In Walker, R. G. and James, N. P., eds., Facies models : response to sea level change, Geol. Assoc. Can., 157-177.
東海三県地盤沈下調査会 , 1995, 平成６年における濃尾平野の地盤沈下の状況 , 東海三県地盤沈下調査会 , 68p.
Galloway, W. E. and Hobday, D. K., 1996, Terrigenous Clastic Depositional Systems, 2nd ed. New York, Springer-Verlag, 489p.
上村喜久子 1997「第四節 荘園公領制の形成と在地勢力」「第五節 絹と糸の荘園・安食荘」『新修名古屋市史第１巻』「第七章 摂関政治から院政へ」名古屋市
村岡幹生 1998「第四章 荘園・公領制下の人々の生活」『新修名古屋市史第２巻』「第四章 荘園・公領制下の人々の生活」名古屋市
山田紘一・野口泰子 2000『埋蔵文化財調査報告 35 千音寺遺跡（第１・２次）』「名古屋市文化財調査報告 47」名古屋市教育委員会
伊藤雅乃 2000『千音寺遺跡（北宮田団地）発掘調査報告書』名古屋市住宅都市局
上村喜久子 2001「「尾張國冨田庄絵図」の主題をめぐって−文書目録と絵図読解−」『愛知県史研究第５号』愛知県
東園千輝男 2001『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書千音寺遺跡』名古屋市上下水道局下水道本部
伊藤雅乃 2002『第２次中川区戸田二丁目付近下水道工事に伴う戸田Ｂ遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局下水道本部
伊藤正人他 2003『埋蔵文化財調査報告書 48』「名古屋市文化財調査報告 62」名古屋市教育委員会
中・近世研究部会 2004「尾張国冨田荘の考古学的研究−成願寺を中心として−」『研究紀要第５号』、（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
熊谷洋一 2004『戸田遺跡発掘調査報告書−第４次中川区戸田二丁目付近下水道工事に伴う調査−』名古屋市上下水道局下水道本部
熊谷洋一 2004『第３次戸田遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局下水道本部
近藤真人 2004『千音寺遺跡発掘調査報告書−第４次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査−』名古屋市上下水道本部
大浜良介 2004『千音寺遺跡発掘調査報告書−第６次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う遺跡発掘調査−』名古屋市上下水道局
蔭山誠一 2005「七宝町の中の冨田荘〜絵図に描かれた荘園と描かれなかったもの〜」平成 16 年海部津島の歴史を考える講演会（2005 年２月 21 日、於 七宝町公民館）、口頭発表資料
伊藤雅乃・熊谷洋一・高梨雅幸 2005『第４次戸田遺跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局
蔭山誠一・加藤博紀・鬼頭 剛・鈴木正貴・松田 訓 2007「中世萱津を考える」『研究紀要第８号』、（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
木村有作 2015「千音寺遺跡（第６次・第７次）」『埋蔵文化財調査報告書 73』「名古屋市文化財調査報告 90」名古屋市教育委員会
大野麻子・蔭山誠一・鬼頭　剛 2015『貝殻からみえる昔のくらし〜貝が語る伊勢湾沿岸の環境と歴史〜』蟹江町歴史民俗資料館特別展冊子、蟹江町教育委員会
※ 脱稿後次の研究を知ることができた。『冨田荘絵図』の認識・理解について、今後検討したい。
磯貝富士男 2004「円覚寺所蔵尾張国富田荘絵図の成立事情」『大東文化大学紀要四十二号』
磯貝富士男 2006「円覚寺領尾張国富田荘絵図にみる海水面変動」『大東文化大学紀要四十四号』